

【ポスター発表】

**行動分析学を理論的基盤としたオープンダイアログ、ユマニチュード、  
ハーム・リダクション、ハウジングファーストの展開****「新しい人間主義」の四大思想の理論的統合とそれらの援助技法の発展を企図して**

○ 渡辺 修宏 (006034)

キーワード：新しい人間主義，理論，行動分析学

**1. 研究目的**

近年、「新しい人間主義」に基づく援助思想・援助技法が、社会福祉の様々な領域で注目を集めつつある。斉藤（2018）によると、それらはオープンダイアログ、ユマニチュード、ハームリダクション、そして、ハウジングファーストである。

オープンダイアログとは、主に精神保健福祉領域で用いられている、統合失調者や発達障害者への介入方法である。非薬物的な精神療法で、対話を重んじたかかわりを展開する。フィンランド発のオープンダイアログは1980年頃から実践されているが、我が国でもオープンダイアログ・ネットワーク・ジャパン（ODNJP）が中心となって普及がすすみ、「オープンダイアログ対話実践のガイドライン（2018）」が注目されてきている。ユマニチュードとは、高齢者福祉領域における認知症ケアを中心に注目されている哲学であり、介護技術であり、援助技法である。フランス発のユマニチュードは、「見る」、「話しかける」、「触れる」、「立つ」といった動作を基本として、医療・看護・介護福祉といった臨床場面で展開されてきている。ハームリダクションとは、依存症者支援に用いられる思想、援助技法であり、合法違法を問わず、精神作用性物質の使用を禁止・途絶させるのではなく、減少させる手続きである。イギリスやオランダからはじまったとされ、現在、ヨーロッパ、オーストラリア、カナダを中心に普及・実践が進んでいる。そしてハウジングファーストは、主にホームレスを対象に、まず住居支援を徹底することによってその対象者の自立を図る援助技法である。これはアメリカ（カリフォルニア、ロサンゼルス）の援助プログラムから端を発し、ハームリダクションと組み合わせ実践されることも少なくない。

以上、4つの援助技法を支える理念、思想、哲学、政策等は実に多様であるが、何かしらのサポートを必要とする人々を効果的に援助するという意味においては共通している。従って、広く援助に関わる者らがこれらを学ぶことは意義深いといえよう。しかし、その学びが単なる技法の習得だけに留まるようでは本末転倒となろう。その意味で、本稿で取り上げた4つの援助技法がどのような理論的基盤によって展開されてきたのか/されていくのか、を欠いてはいけない。否、むしろ、ばらばらではなく一元的に理論的理解することが可能であればより望ましいと言えよう。そこで本稿は、上で述べた4つの援助技法、援助技術の一元的な理論的基盤を探求するとともに、これらの援助技法の発展を企図した考察を試みる。

## 2. 研究の視点および方法

本研究は、「新しい人間主義」に基づく援助思想・援助技法と呼ばれるオープンダイアログ、ユマニチュード、ハームリダクション、そしてハウジングファーストの実践の特徴と共通事項を踏まえた上で、それらを床支えする一元的理論を探究するための理論的考察を行う。

## 3. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会研究倫理委員会規程を遵守して行われた。

## 4. 研究結果と考察

4つの援助技法の主な対象、援助場面などには多様な違いがあるが、そうであっても全ての技法に明確に共通する要素があった。それは、どの援助技法もその援助対象者にまず、①しかるべき場面、援助の生起条件、対象者を取り巻く環境の設定/調整（語りの場、他者とのわかりやすい接触、援助の焦点となる現状の問題行動の許容、住まいの提供）によって、②対象者のより望ましい行動を誘発する、あるいは、③その行動が繰り返し生起するような結果事象を設定するということ（援助者の応対、他者からの肯定・称賛・アタッチメント・援助目的の完遂、自立につながる行動の完遂など）の3点によって展開されるということであった。

このような、対象者の望ましい行動を導くために、その行動の生起前後にしかるべき設定するという援助者の試みは、さまざまな援助事例・場面・文脈であろうと一貫している。このように、行動の前後に焦点を絞ることに合致する理論として、徹底的行動主義（または機能的文脈主義）に基づく行動分析学がある。

行動分析学は、いわゆる「思いやり」や「こころ」といった形而上学的概念の使用を放棄し（注：そのような概念を否定しているわけではない）、徹底して人の行動/反応に焦点を絞り、人の行動の予測と制御（影響）を試みる理論である。その援助事例で求められる対象者の具体的な行動/反応を誘発するためにしかるべき条件を設定するというアプローチと、ひとたび対象者の行動が生起するならばそれを維持/向上させるためにしかるべき条件を設定するというアプローチは、そのまま、行動分析学に基づく援助技法と言えよう。

本研究の考察の結果、行動分析学に基づけば、4つの援助技法は全く異なるパラダイムにあるというわけではなく、実は全ての援助が一元的かつ理論的に説明可能で、かつ、これらの援助技法の更なる発展が見込めるということが明らかとなった。この理論が示唆する重要な学びの一つが、「対話する場を設ければいい」、「視線等をしっかり合わせてかかわればいい」、「飲酒や薬物の使用量を以前より減らせればいい」、「住まいがあればいい」という形態的援助にとらわれるのではなく、そのようなかかわりによって対象者のしかるべき行動が生起され、維持され、改善され、自立につながるという機能的結果/成果に注目するということであろう。

### 参考文献：

斉藤環（2019） 「新しい人間主義」の潮流，四大思想 オープンダイアログ/ユマニチュード/ハームリダクション/ハウジングファースト 精神看護 vol.21 No.6 532-541